

【書評】

竹内薫 著
『99.9%は仮説 思い込みで判断しないための考え方』

「非常識」は存在しない

本書で筆者は、世界は全て「仮説」で成り立っているということを主張し、「仮説」にとらわれないために必要な考え方について述べている。本書における「仮説」とは、個人がそれぞれ持っている「常識」を意味している。

まず筆者は、世界は全て「仮説」で成り立っているという主張の理由について古代天文学を例に挙げて述べている。古代天文学では、観測されるさまざまな天体の現象について「天は神が支配するもので、完全な世界であり、よって星の軌道は完全な円である」という前提、つまり「仮説」の中でのみ議論が交わされ、発展してきた。しかし約1000年後、観測データを元にした計算の結果、その「仮説」を根本的に覆す「星の軌道は楕円である」という「仮説」が生まれ、それまでの宇宙観を大きく変えたというものである。しかし、観測データも「仮説」の影響を受けて集められたものであるため、これもまた「仮説」ということになる。この古代天文学の例から、「仮説」というものはまた別の「仮説」によって覆される可能性を持ったものであり、「定説」と呼ぶことができるものは一つも存在しないということを示している。

筆者は、「仮説」にとらわれないために必要な考え方について主に2つ述べている。1つ目は、「仮説」の存在を意識することである。日常的に目にしたり、聞いたり、教わったりしている「仮説」について常に疑問を持つべきである。また、自分の頭の中で考えることの多くが「仮説」であるということを理解しておかなければならないと筆者は述べている。

2つ目は、事実は1つではないという考え方である。頭の中にある「仮説」の枠組みは人それぞれ異なっており、それによって世界の見え方自体が異なっている。そのため、それらの「仮説」から導き出される事実は1つではないと筆者は述べている。また、自分の「仮説」を絶対視せず、他の人の「仮説」

も理解しようとする柔軟な態度が大切であると主張している。

本書は、私にとって良書であると感じた。自分の見ているもの、考えていることの全てを見つめ直すことができたからである。今、目の前にあるものはどのような「仮説」を元に作り出されたものなのか、今自分の考えていることの根本にある「仮説」はどのようなものか、ということ意識することができるようになった。

本書を読んで私は「非常識」というものは存在しないという考えを持った。世界は仮説でできていて、人それぞれ持っている「仮説」が異なっているということは、「固定された常識は存在しない」ということを意味する。つまり、「非常識」も存在しないということになるからだ。ここでは「非常識」の逆の意味として理解しやすいように「仮説」を「常識」と置き換えて意見を述べていく。私たちは日頃、公共の場でマナーを守らない人や社会で一般的に共有されている知識を持っていない人のことを「非常識な人」と呼ぶ。しかし、固定された「常識」は存在しないのであれば、その人の行動が自分の持っている「常識」の枠に当てはまっていないことを理由に「非常識」と呼んでいるに過ぎない。確かによく考えてみれば、「非常識」と呼ばれる行動をする人は、私の持っている「常識」からは想像もできない理由があって、そのような行動をしているのかもしれない。生きてきた社会が違って、私が持っている「常識」が、その人が持っている「常識」の枠組みから外れているのかもしれない。また逆に、その人が持っている「常識」から外れたことを私は当たり前に行っているのかもしれない。もちろん、周囲の人を不快にさせることを肯定しているわけではない。行われている行動だけに注目して一方的に否定するのではなく、その行動がなぜ行われているのかということ、根本にどのような「常識」が存在しているのかということに注目しなければならないということである。

これらのことから、「非常識」と感じるということは、その人が持っている「常識」を元に行われた行動と、自分の持っている「常識」を元にした行うべき行動の考え方が衝突しているだけなのである。「非常識」というものは存在しないと私は考える。

筆者の提案する「世界は仮説でできている」という考え方は、筆者の頭の中の「仮説」から考え出された、これもまた「仮説」である。そして、本書から「世界は仮説でできている」ということを学んで考え出した「非常識は存在しない」という私の考え

も「仮説」に過ぎない。そのことを理解したうえで、「非常識は存在しない」という「仮説」を覆す、別の「仮説」を考え出す挑戦をしていきたいと私は考えている。

杉村 明希 (人14-133)